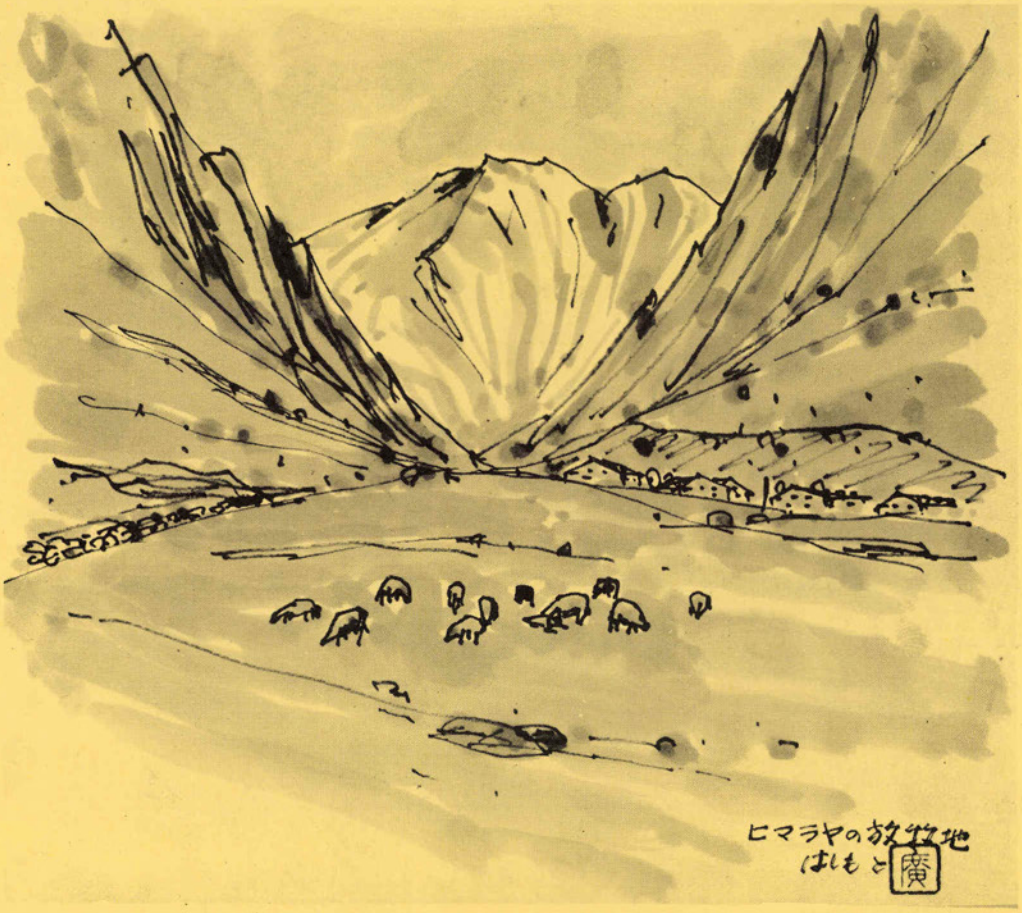
昭和51年5月9日第三種郵便物認可（毎月1回1日発行）昭和51年11月1日発行　通巻60号

ヒマラヤ

HIMALAYA

1976年11月号

特集・1976年HAJアフガニスタン登山隊現地便り



日本ヒマラヤ協会——HAJ

HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

HAJヒマラヤ集会

【東京定例集会】――――――（無料）――

毎月第4金曜日　18時30分～20時00分・ＨＡＪ東京事務所。毎月第1金曜日は、自由集会です。ヒマラヤに関する個人的な相談、ご友人との打合せなどにＨＡＪ東京事務所をご利用下さい。なお、毎週金、土の13時～20時まで事務所はご利用できます。

11月26日　アッサム、ビルマ、ダージリンの話
12月3日（第4金曜日、24日は休み）
　　ネパールへの旅、トレッキングのガイド
ＨＡＪの「ネパールへの旅」（600円）の本持参のこと
52年1月28日　アフガニスタンの山（ワハン隊速報）
2月25日　中央アジアの山々
3月25日　インド・ヒマラヤ情報

【北海道定例集会】――――――お茶代・実費――

毎月第1月曜日　18時頃から、札幌市北1西4棟向　喫茶「ねむの木」の3階特別室でおこないます。奇数月定例，偶数月自由集会
問合せ先　大崎正信理事

「ヒマラヤ」用原稿募集

ヒマラヤに関するものなら何でも結構です。1ページは400字詰約4枚です。ヒマラヤ紀行を特に歓迎します。原稿は　〒468名古屋市天白区一つ山1丁目44－7 HAJ名古屋事務所「ヒマラヤ」編集委員会へ。特別なものを除いては原稿料は差し上げられませんができ上った「ヒマラヤ」を若干部進呈します。

【名古屋定例集会】――――――（無料）――

毎月第二金曜日　18時30分～20時00分エア・インディア、名駅前ホテルニューナゴヤ747号（7階）
11月12日　アッサム、ビルマ、ダージリンの話
12月10日　ネパールへの旅のアドバイス
ＨＡＪの「ネパールへの旅」（600円）の本持参のこと。
52年1月21日（第3金曜日、14日を変更）
　　アフガニスタンの山（ワハン隊速報）
2月18日（第3金曜日、14日を変更）中央アジア
3月11日　インド・ヒマラヤ速報

―入会のおすすめ――――――――――

ヒマラヤやシルクロードに関心をお持ちの方々のご入会をお待ちしております。登山のみでなくヒマラヤをめぐるあらゆることを対象にします。
問合せ先〒468名古屋市天白区一つ山1－44－7
　　日本ヒマラヤ協会名古屋事務所

＜会費納入の方法＞

入会金　2,500円　　会　費　4,000円（年額）

郵便振替　名古屋21645番「日本ヒマラヤ協会」　振込用紙はどこの郵便局にもあります。送金料も安くて便利です。

銀行振込　東海銀行鳴子支店　185－338番「日本ヒマラヤ協会」普通口座

現金書留でもよろしいですが、できるだけ振替をご利用下さい。現金、現金書留の場合のみ領収書を発行します。

ヒマラヤ　11月号目次

＊ＨＡＪを考える（その4）……1
＊研究会だより……2
＊Ｈ＆Ｓ　Planのページ（その4、その5）…2
＊最近のカンジロバへの隊概要……4
＊ヒマラヤ学入門（その44）
　　パキスタン航空について……5
＊日本からヒマラヤから……5
＊HAJアフガニスタン隊便り（その3～その6）…6
＊4度目のネパール……14
＊ネパール理事・ランジャン氏来日……14
＊ヒマラヤに関する質問と解答……15
＊河口慧海の会・参会記……15
＊新刊・旧刊……16
＊「ヒマラヤ」第51号～第60号 主要目次 …17

≪ HAJを考える ——— その4 ≫

ヒマラヤへの最短距離

会員になった歴史だけはもう古いグループの中に入ってしまったが、何しろ70才に手の届くような戸籍の上では老人組だから、ガムシャラにヒマラヤを歩き、研究もしようという体力も精力も若い人に及ばないのはまた、理の当然と言えるかも知れない。従って、理事にはもっと意欲的に活動している現役の人が一当良いのではないかと、今でも思っている。といって形だけは理事を引き受けてしまったのだから、私の残された人生街道の一駒にささやかでもヒマラヤの花を咲かしてみたいと考えている。

さて、専務理事から"ヒマラヤ協会を考える"というテーマで何か書けという重荷を背負はされてしまったので、それではとペンを執ったものの、何を書いてよいのか分らないのが本心。

そこで、書棚から「ヒマラヤ通信」（第1号1968・4）……現在の「ヒマラヤ」の前身）をとり出して頁を繙いてみた。勿論、トップには柴田会長の「協会の意図するもの」という標題で、ヒマラヤの旅の楽しさ、登山、学術、芸術などの調査研究を進めると同時にヒマラヤの国々と日本との友好親善の掛橋となることが大きな目的であって、そのためのお役に立ちたいとＨＡＪの設立趣旨を述べられている。この設立趣旨はヒマラヤ通信第1号から今日のヒマラヤに発展した8年間少しも変ることなく脈絡と持続されてきたと私は考えている。

会員数も当初の名簿を見ると昭和42年2月現在で253名だったのが現在は1,000名を超す大きな協会に発展したのは御同慶の至りと喜んでいるものの、「ヒマラヤ」が月刊誌となり、また、研究成果や記録案内等が発行され、エキスペティションも何回か企画実行されてきた現況に考えをおよぼしても、ただ、それだけで手放しで喜んでおられないのではないだろうか。

10年前と比べると、ヒマラヤは誰の手の中にもはいるようになったのだし、海外旅行がいとも簡単にできる今日、もっと沢山の人がヒマラヤの本当の姿、良さを見通してもよいのではないか。何も8,000m峰に登るばかりがヒマラヤではないのは当りまえで、まだまだ淳朴な余り都会ずれのしていないヒマラヤ地域の人々と語り合い、また、我が日本からは失われてしまった大古の自然に触れてくるのもヒマラヤを愛する我々の目的の一つと考えてもよいのではないだろうか。

ヒマラヤ地域も、年一年文明文化の悪い波に洗われてきそうで憂慮に耐えない。ヒマラヤの現地住民の生活を昔の儘にしておくというのではなく、彼らの生活の向上には我々も大いに役立ちたいものである。一当心配なのは彼らの心をスポイルし、残された自然を汚損破壊していく心ない者がヒマラヤ地域に足を踏み入れることである。

ＨＡＪの会員に対してはこんな心配は無論必要ないが、素晴らしい世界のヒマラヤを後世に引き継いで行く積極性だけは持っていたいと思っている。

それにしてもこの10年、何と沢山のヒマラヤ関係の書物が生れてきたことだろうか。また、エキスペディション、トレッキング、観光でヒマラヤ地域に足を踏み入れた人々の数は物凄いほどである。10年間ヒマラヤ熱は昇るばかりだったが、まだなお上昇して行くに違いない。その上昇率から考えるとＨＡＪの会員数はどういう訳か伸び率が悪いように思える。ＨＡＪの会員になることがヒマラヤの知識を深める最短距離であると思えるので、会員ではあるがまだヒマラヤに行っていない人を含めて、ヒマラヤに対して関心を持っている人はどしどしＨＡＪの会員となって、協会を大いに利用することをおすすめしたい。

幸いなことに、会員にはヒマラヤの経験者が全国に散らばっているので、会員相互の紐帯となって何等かの至便が得られるのではないだろうか。

（小林英見　関東地区理事）

「ヒマラヤ」38号（カシミール特集）、42号（50年5月）、の保存用がなくて困っています。ご寄附いただける方はＨＡＪ名古屋へ送って下さい。ご協力をお願いします。

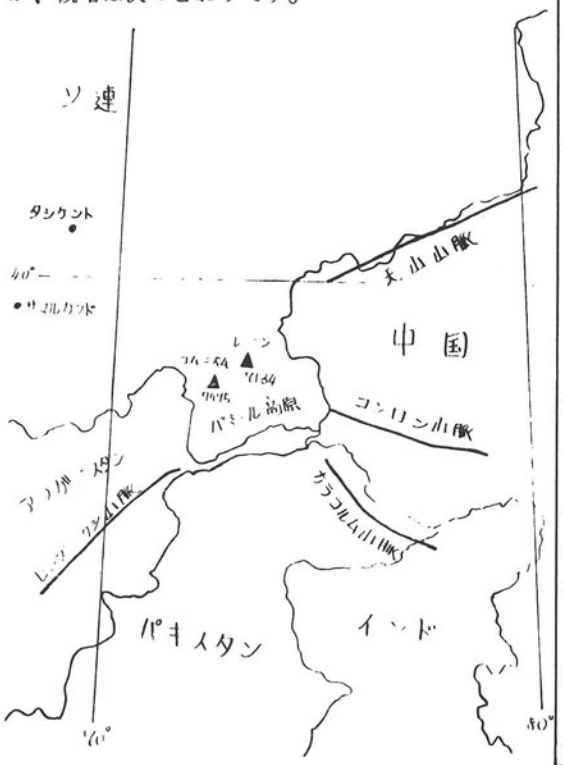
≪ H & S Plan のページ ≫（その4）

コムニズム峰登山隊員・パミール高原ツアー参加者募集

ＨＡＪでは創立15周年記念行事として「シルクロード＆ヒマラヤ」計画に取り組んでいる。これは1977年から1981年の5年間にわたり、ヒマラヤ登山や車によるシルクロード一周を行う予定である。この計画の最初に中央アジアの秘境パミール高原で1980年まで開催されるソ連山岳連盟主催の国際登山大会に来年参加し、コムニズム峰などの登山を行なう予定である。

今年開催された国際登山大会は14カ国、男女含めて約200名が参加した。B・Cはパミール山中の高地（約4,000ｍ）に設営される。ここはエーデルワイスやサクラ草が咲きみだれた美しいところである。開会式には民族音楽やおどりが披露される。

パミール高原は中国国境に近いところなので一般には入域困難な場所であるので、ＨＡＪではこの機会に登山隊員はもちろんであるが、登山をしないが中央アジアに興味のある方を含め、参加者を募集します。詳細な日程等については追って「ヒマラヤ」誌上または参加希望者にお知らせしますが、概略は次のとおりです。



1. 期間　1977年7月下旬～8月中旬。
2. 費用　約80万円（旅費・滞在費一切）。
3. 人数　10名（男・女）
4. 〆切　11月末日。

出発前に低圧室で高処に対するトレーニングをおこないます。また、第1回の打合せ会を11月6～7日の愛知県蒲郡市でのＨ・Ｋ会議に合せて行ないます。参加希望者は、下記に申込んで下さい。

〒487　春日井市白山町　藤山台団地327－209
増田秀穂

研究会だより

東部ヒマラヤ研究会　藤井　毅

インド・アルナチャル（旧ＮＥＦＡ）オープンか

いささか楽観的すぎる見方ですが、今年中にでもアルナチャルが解禁される可能性が出てきました。60～70％分の確実性があります。

インドの週刊誌「ＬＩＮＫ」の51年5月30日号によると、同号はインド観光の特集号でしたが、アルナチャルが専任のツーリズムオフィスを開設して、観光客向にアピールするということです。今までになかったことです。

すでにツーリストロッヂなどの開設も進んでいるようです。記事が出たのが5月ですので、情勢は進展しているかもしれません。

一応アルナチャル観光局に問い合わせの手紙を出していますが、一部のガイドブックではアルナチャルが特別な手続もなしに入れるような記述もみられますので、解禁の可能性大といったところなのです。

余談となりますが、Himalayan Journalの1966年号にPatricia Coxという人がNEFAに入ったときの記録がのっていますが、要するに全く入れない土地でもなかったようです。

こういった可能性がでてくると、たのしくてしょうがありません。「LINK」は右派共産党系（ソ連支持）の雑誌で、現ガンジー政権支持の立場をとっています。

≪ H & S Plan のページ ≫（その5）

ネパール，インドへの登山隊の計画

① カンチェンジュンガ登山計画（1978～1981年）

Expedition研究会は1981年に新しいルートによるカンチェンジュンガ登頂を計画し、準備に入っている。この計画に参画したい方はできるだけ早い時期にExpedition研究会員になり、おそくとも1978年3月頃までに、この隊への参加意志を表明した方を予備登録隊員として認める。正式隊員は予備登録隊員のうちから追って決定する予定です。

なお、1981年の本隊に先立ってプレ・カンチ計画を企画し、カラコルム（ラカポシ、バツーラⅡ、ディスティギルサール、ナンガパルバット、プマリキッシュ）、ネパール（チョオユー、アンナプルナⅡ北面）のうちのいずれかに遠征する。

1981年の本隊に参加希望する方は、このカンチ・プレ計画に参加することが望ましいが義務ではない。しかし、これと同等以上の登山を1980年までにおこない、それに加えて、カンチ計画に積極的に参加することが望ましい。

カンチ委員会（仮称）事務局

② サセル・カンリⅡ峰登山計画（1979年）

＜プロローグ＞ カラコルムの東部、インドの北辺の未踏峰、サセル・カンリⅡ峰登山の計画は1974年、HAJヌン・クン山群踏査隊の事前研究から始まっている。1974年の踏査隊、1975年の本隊、1976年のサセル・カンリ調査隊とHAJの多くの会員がこのインド北辺の山々に目をむけ、訪れている。これらの隊はそれぞれに独自の目的をもち、成果をあげている。

サセリ・カンリⅡ峰登山はこれらの隊の活動を基盤としてできあがったのである。

キャラバンはカシミール州、ラダックの主都レーから始まる。ラマ教のコンパ（お寺）をあとに砂漠の中の氷雪の山へむかう。

＜メンバー＞ 先発隊、本隊と2隊に分け、それぞれが、独自の目的を持ちながら、しかも、有機的にからみ合う“組合せの妙”を充分に生かす。

先発隊は学術調査、登山の事前準備をおこなう。本隊は登山に集中する。スピーディな事務処理と、この山群を訪れたいという熱意のある者のうちから、先発隊、後発隊それぞれ4名を決定する。特に登山を主とする本隊のメンバーはいずれもが登頂者となり得る能力の者より選ぶ。

2つのパーティを組合せることにより、現地での出発前の準備は最小限にできるであろう。また、HAJ H & S Plan のキャラバン隊も全面的なサポートをすることになる。

＜計画の日程＞ 1978年2月末日

隊員希望者予備受付

5月初旬

隊員希望者正式受付

1979年 7月10日 先発隊出発 ）（キャラバン隊合流）
8月10日 〃 帰国 ）約1カ月

8月 5日 本 隊出発 ）約1カ月
9月 5日 〃 帰国

（注 この登山期間は変更になることがある）

＜費 用＞ 1人約80万円、全額個人負担とする。なお、サセル・カンリの登山が不許可の場合は、ヌンおよびその周辺の山群の未踏6,000m級登山に変更する。ヌンは北稜および西稜よりの同時登頂を目指すことになろう。

事務局 〒164 東京都中野区中央3丁目

HAJ 東京事務所内 鈴木康志

③ ハルディオル登山計画（1978年）

Expedition研究会は1978年にハルディオルの初登頂を目指して準備に入っている。これは、カンチ計画、サセルカンリ計画と並列しておこなうものであるが、各計画は独立して進められる。

最近のカンジロバへの隊概要

＜1971＞大阪府岳連隊

シェルパ：アヌ、コック：パサン

8月22日伊丹発、23日カトマンズ着。

9月4日雨のポカラ出発。ポーター35名。ポカラ……ベニ……ダルバン……ジャルジャラ峠……ドルパタン……ファグネ峠……グスタン・コーラを横切り……ペルマーシン・コーラ……バニダール峠……ジャングラ峠……ドゥナイースリガド川……リンモ……ボクスンド・コーラ、9月28日着。

9月30日、ベリカプワのカルカにB・C（3,975 m）10月4日、湖を越えたところの広い川原にC_1（4,602 m）。10月12日南氷河に入り、途中から岸稜を越えて5,120 mにC_2を建設した。15日～18日はひどい降雪があった。

10月23日に北氷河の端に5,550 mのC_3を建設した。10月25日にC_3から2名が南の稜線伝いに6,556 mのピークへ登頂した。Tshokarpkhangと名命した。

11月5日にB・Cを撤収し、18日、チョーダビシ・コーラ経由でジュムラへ出、11月20日に空路カトマンズへ帰着した。

＜参考文献＞「岳人」297号

＜1972＞東京山旅倶楽部（西野広(L)、桑畑茂、広田豊数、他1、シェルパ1）

パトラシ・ヒマールの最高峰、カンデ・ヒウンチュリ（6,627 m）に10月18日桑畑、広田両隊員が登頂した。

9月30日にチョードビシ・コーラ源頭にB・Cをおき、ルートは神戸高大隊のものとほぼ同じで、第4キャンプまで作った。

この登山のあと、隊を2分し、一隊はボクスンド湖を往復し、別の一隊は北側のラングー・コーラからトルボへむけて歩いた。

＜参考文献＞「岩と雪」30号　48.4　「ネパール・ヒマラヤ1972年」の記事の中に抄録。

＜1973＞日本ヒマラヤ協会隊

帰国報告書ならびに「岩と雪」33号48.9に「カン・ジェラルワ初登頂、カンジロバ・ヒマールの未踏査地域」として報告しているので省略。1976年10月10日、公式報告書を発行した。

＜1973＞北里大学隊（河村栄二(L)、他5名）

9月29日、フォクスンド湖の上部にB・Cを建設（4,395 m）。ツォ・カルポ・カンの南にある氷河からコルを越え、10月25日にC_3（5,600 m）を建設し、29日に北峰（5,915 m）に登頂。次いで30日にC_4（5,815 m）から守山栄賢、武市守弘とサーダーのアヌーが北峰を越し、主峰（6,227 m）に初登頂した。Sherku Dho Imaと名命した。

11月10日、B・Cを撤収し、2隊に分れ、ノルブ・カン周辺、バガ峠、カンタイガ付近を踏査しマンドアに着いた。11月23日、マンドを出発し、カトマンズに帰った。

＜参考文献＞「岩と雪」36号 49.4　「ヒマラヤノヒンズークシュ1973年」の中に抄録。「カンジロバ・ヒマール登山報告書第1部、北里大学ヒマラヤ登山隊1973年」同隊発行1975年

＜1974＞山形大学ヒマラヤ遠征隊（亀井英二(L)伊藤捷生、亀井重郎、桜田昭嘉、中野守成、白石明、大竹直）

カトマンズより空路ジュラムへ。3月29日ジュラム発。フリコットからパニパールタ・コーラに入り4月7日、4,200 mにB・C建設。パンパール・コーラの4,400 mにC_1、4,900 mにC_2、5,400 mにC_3、5,600 mにC_4とのばし、4月27日、中野、白石の2隊員とシェルパのアヌーがC_4からビジョラ・ヒウンチュリ（6,386 m）に初登頂。4月28日にも隊長、伊藤、桜田、大竹の3隊員が登頂した。29日、B・Cに帰着。23日、ポカラ着。

＜参考文献＞「岩と雪」42号　54.4（抄録）

＜1975＞月稜ヒマラヤ登山隊（滝口明(L)、小林進二、矢沢義秋、高頭清次、多々良修一、萩野正昭、伊達実）

9月22日ジュムラ発。ルカ・コーラ源頭3,900 mにB・C建設。のちに4,200 mにB・Cを変更。10月13日、4,530 mにC_1、23日には5,770 mにC_3、31日に、5,900 mにC_4を建設。11月4日、6,300 mのC_5予定地にむかった2パーティのうち高頭隊員が雪が崩れたためジャクド・コーラに転落死亡。登山は中止され、11月16日、B・Cを撤収した。

＜参考文献＞「岩と雪」49号　52.6

＜ヒマラヤ学入門＞ その44

パキスタン航空について

パキスタン航空は1953年国営航空会社として設立された。カラチ・ロンドン間に国際線を開設して以来、現在では、国内、国際線を含めて32カ国、53都市に路線を拡張している。当初、国内線を主体にしていたものの1972年以後は国際線に力を入れるようになった。保有数はＤＣ－10（３機）、Ｂ707（６機）、Ｂ720（６機）、Ｆ－27（８機）である。1976年５月より、Ｂ747（２機）を導入し、更にＤＣ－10（１機）が８月より就行予定となっている。従業員数14,352人。特に航空機整備技術・施設などは中近東、南西アジア地区の航空会社中、随一を誇り、他社への技術・施設供与も行なわれている。現在、イラク航空エア・マルタ、リビア・アラブ航空に対して経営管理、テクニカル・ノーハウ、各種訓練面で援助を行なっている。過去、５年間に、パキスタン航空が訓練した航空関係者は20カ国、1,500名に達している。

日本乗入れは、1969年11月１日南廻り便を週２便開設したのに続き、1975年２月より更に北京経由を２便、増便し週４便となった。中国乗入れは1964年５月で、これは共産圏の航空会社を除いては最初であった。東京発、北京・ラワルピンジ経由カラチ行は月下に壮大なヒンヅークシュや、カラコラム山脈を望むことができるのも楽しみの一つである。また、ラワルピンジよりはチトラル、ギルギッド、スカルドに国内の定期便が運行され、特に北部山岳地帯には軍用機Ｃ－130を運行して貨物輸送、悪天候に対処している。なお、パイロットは全部パキスタン人で東京便開設以来、日本人スチュワーデスも搭乗している。

設立：1953年
本社所在地：PIA BLDG, KARACHI AIRPORT, KARACHI, PAKISTAN
東京本社：東京都千代田区有楽町１－10－１

日本・韓国地区総支配人＝MUSTAFA KAMAL
登山隊係：藤川厚生
大阪営業所：大阪市北区梅田町８　西阪神ビル

空港事務所：東京都太田区羽田空港２～４～３

ヒマラヤ方面へのフライトは、
①東京－マニラ－バンコック－カラチ
②東京－上海－北京－ペシャワール－カラチ
の２つのコースがそれぞれ週２便あります。時刻はときどき変更になりますので、上記へお問合せ下さい。

日本からヒマラヤから …… 読者だより

Mr. Sonam Norboo Spurkapa　8月8日ラダック

私はラダックのレーに住む日本語の話せるラダック人です。レーを訪れていたＨＡＪの会員の方より、貴会を紹介してもらいました。今年から私はレーで旅行会社を開くことにしました。日本語が分りますので便利と思います。せいぜいご利用下さい。住所は下記の通りです。

Nono Travel Agents, Leh, Ladakh

上田竹三　様　　名古屋　　8月26日

８月初旬よりスイスの山を撮影に出かけ２週間ほど滞在しました。ユングフラウ・ヨッホをゆっくり歩いて見たかったです。

安藤昌宣　様　　東京　　８月25日
（六峰山岳会ハラムク登山隊々長）

ハラムク峰登山につきましてはいろいろとお手数をお掛けしました。ハラムク峰エレン・ルート上部は発達したクレバスに悩まされ、また、雷と霧にたたかれ、膝を抱えたまま一睡もできなかったビバークの夜もありましたが、８月15日、６名が登頂しました。そして、無事、帰国しました。

川田　寛　様　　高知県南国市　９月１日

Expedition Ⅱ は発行されたでしょうか。ぜひ１部お分け下さい。（52年３月頃には発行予定です。発行しましたら、「ヒマラヤ」でＰＲします。ＨＡＪ）

特集

HAJ 1976アフガニスタン登山隊帰国

去る8月30日、全員無事帰国しました。ご協力を感謝します。以下は行動概要と現地だよりです。

有田　豊
隊　長

松舘　正義

松田　要悦
登攀隊長

村山　延久

佐藤　優
渉　外

脇田　治

6月28日	羽田発 12:45（パキスタン国際航空機）
29日	北京経由、ラワンピンディ着
～	自動車にてペシャワールへ、デポ装備受取り
7月2日	バスにてカイバー峠越え、カブールへ
～	カブールにて手続、食糧買付
9日	
10日	自動車にて
～	カブール----サラン峠----クンドゥズ----ファイザバード
12日	
～	馬にてキャラバン、ムンジャン谷へ
16日	
18日	登山・踏査活動
21日	ムンジャン川第2の谷で登山。コーイ・ブラ（5,360 m に初登頂（第1回登山活動）。
～	
26日	
27日	第6の谷（ディアンビー谷）へ移動。
1日	ディアンビー谷の無名峰（5,480 m）などに登頂（第2回登山活動）。
～	
9日	
8月10日	馬にてキャラバン、ブルン峠を越えアラカドリカンディ----アサダバード----ジャララバード
～	
21日	
22日	カブール帰着・帰国準備 数隊員バーミャン、バンデアミールへ
26日	カブール----ペシャワル----ラワルピンディへ
29日	ラワルピンディから北京へ
30日	羽田帰着

寺村　重一

村上　秀三

林　清剛
医　師

HAJアフガニスタン登山隊現地便り（その3）

カブール出発

7月27日　ムンジャン川第2谷ベース・キャンプにて。

ワハン入域が不許可になり、現地にて全隊員と計画変更を練り、概要、次のような予定を立てて7月10日カブールを出発しました。

現地変更のため、他の6,000 mクラスは山域資料の手持ち資料からは断念。5,000 mクラスにすること。準備した物資の量と期間から2カ所で登山活動が可能であること、日本隊ができるだけ入域していない地域、ということでヌーリスタン地域を選び、北から南へぬけ出るコースをとることで意見が一致しました。

7月上旬インドのガンディ首相のカブール訪問で官庁関係が多忙で、申請が数日遅れましたが、7月7日手続きを完了。7月8日、現地食糧等の買出し。7月9日は夜半までパッキングに追われました。

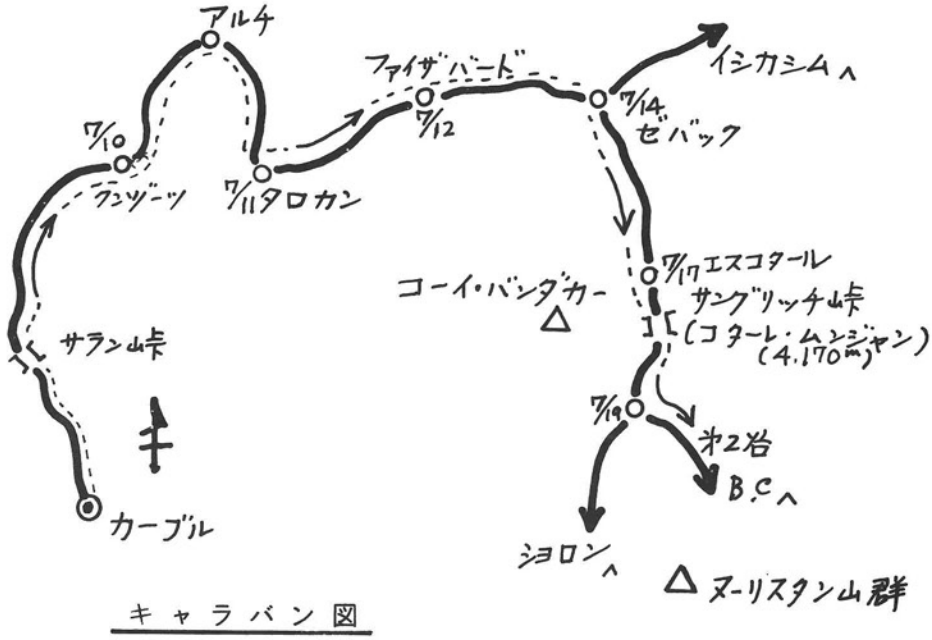
7月10日

待望のカブール出発となりました。トヨタのダイナをチャーターし、クンヅーツまで快適なドライブ。スピンザ・ホテルに投宿。夕食はガーデン・パーティとなって日本では経験できない食事形式で隊員一同元気でした。

7月11日

ファイザーバードへの道が橋がこわれているということでクンヅーツから北上。アルチというアム・ダリアのソ連領を対岸にながめる地点まで砂漠をドライブ。すさまじい経験です。30Kmの距離を3時間かかったと書けば、ご理解いただけるでしょうか。ようやくのおもいでタロカン着。スピンザ・ホテル・タロカンに投宿。宿帳には数日前、投宿したブルガリアのノシャック隊がここで車をかえて出発したことが記されていました。

7月12日



キャラバン図

我々もトヨタ・ダイナを解約して、ソ連製中型四輪駆動トラックにかえてファイザーバードへ出発。このあたりのドライブの様子はあまりこれまでの報告書に書かれていないのですが、アフガンの主要道とはいえ登り下りがはげしく悪路で激流の断崖あり、えんえんと続く八峰のような岩山のながめもあったりで、荷台の隊員もふりそそぐ太陽に対しても大奮闘でした。ファイザーバードではホテル・バダクシャンに投宿。ブルガリア隊もここにまだ投宿中で、交流を深めました。

通訳なしのキャラバン

7月13日

チェック・オフィスに出頭。旅行許可書を持って行くと、カブールから同伴した通訳のナスルラ氏（ジャララバードの看護学校学生カブール在住）をつれていってはならぬ。こちらで指名する通訳をつれていけということになり、半日もめたが、ナスルラ氏を解約。かつ、我々だけが出発してよろしいということになりました。おそらく日本隊にとって通訳なしで活動するのははじめてのケースと思います。

同日は出発できず、ファイザーバード泊。

7月14日

今日はゼバックへ出る。増水で道の消えた河川をソ連製トラックはバンパーを水にもぐらせても前進。ゼバックではすばらしいところでキャンプ。

7月15日

ゼバックにて馬の手配で滞在。1頭1日200アフで交渉成立。これは相場より大変安い値段でした。通訳なしでどんどん話をつけていくことは非常に面白く、かつ有意義なことに思えます。

7月16日

本格的キャラバン開始。馬、9頭で出発。ここで兵士2人が護衛とチェックのために我々の隊につけられました。途中、チェック・オフィスの士官（コマンダー）に出会い午後はかなり出発がおくれましたが、途中の河川、サングリッチ川の幅約1,000 mの大渡渉は馬1頭に隊員2名がのり壮観でした。

ゼバックの大出合いを見おろす高台で泊。

7月17日

エスコタールへ半日で着。ここで馬をとりかえさせられました。半日の活動だから、半日分を支払うということで交渉成立。こんなこともアフガンでは初めてと思います。通訳なしで成立したので、みんな顔がほころびっぱなしでした。

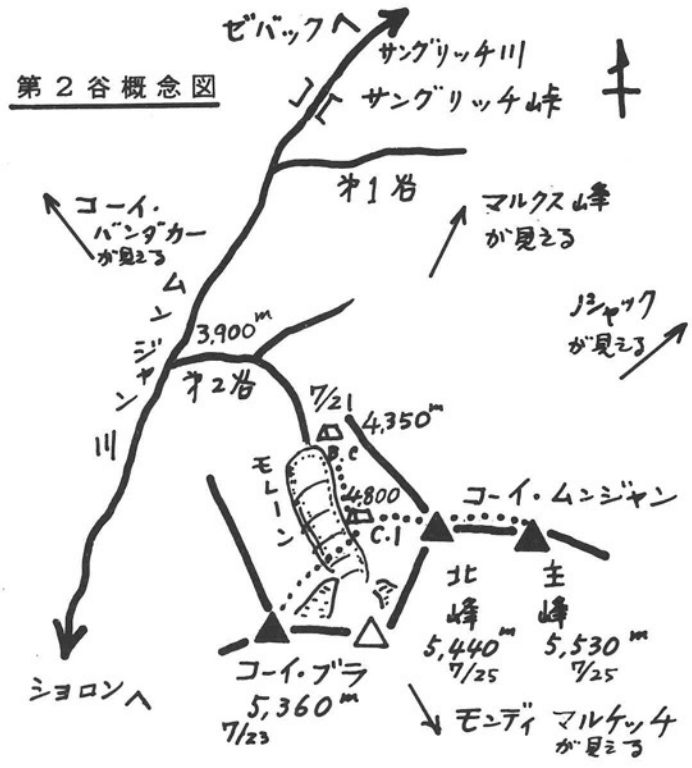
7月18日

バンダールというドラー・パスへの分岐の国境守備隊の施設のあるところで泊。

7月19日

出発のとき馬方ともめましたが、兵士の活躍で出発。サングリッチでエスコタールの馬は追いか

えされ（ここでも半日支払いが成立）、峠はエスコタールで合わせた高度計で4,170 mでした。この辺は先年のＲＣＣ隊がベース・キャンプをおいたところです。コーイ・バンダカーの東面がすさまじい姿でみえました。峠を西へムンジャン川を下り、第２谷の出合で泊（3,900 m）。



コーイ・ブラ（砂糖の山）初登頂

７月20日

休養日として蝶採集グループは再び峠の上へ出かけました。

７月21日

第１回の登山活動山域として、この第２谷をつめてベース・キャンプ（Ｂ，Ｃ）を建設することにして、兵士に伝えると、谷は馬があがらないということでもめましたが松田、松舘、村山の３人の相談でショロンへ南下する、と、もちかけて出発。あっというまに馬方をしり目に渡渉。どんどん谷に入り、馬方もあっけにとられてついてきました。ガラ場をよくぞあがってくれたと思います。４350m地点にベース・キャンプを設置。やっと我々だけのキャンプとなりました。この谷はまだ登山隊は入っていないと思います。正面につきあげる雪のついた山は４つの頂上が確認できます。左右のピーク、２つをねらうことにしました。

７月22日

松田、松舘、村山、佐藤の登攀隊員４名とカメラマン村上の５人で第１キャンプ（C_1）建設（4,800 m）

７月23日

右の無名峰にアタック。雪面をつめて左肩に出て稜線通しで5,360 mのピークに全員登頂。コーイ・ブラと仮称しました。初登頂だと思います。ブラは現地語で砂糖のこと。真白い雪をつけた山なのでこう命名しました。頂上から南、そして東にかけてヌーリスタンの山群が堂々と望見できました。ここはヒンズークシュの大展望台といえます。

７月24日　　休養日

７月25日

左のピークめざして松田、松舘、村山、村上の４名がアタック。コーイムンジャン主峰（5,530 m）。北峰（5,400 m）を踏んで下山。ＲＣＣ隊のものと思われるロック・ハーケン１本、アイス・ハーケン１本を回収しました。翌、７月26日は休養日としました。

７月27日

第１回の登山活動を終えてＢ・Ｃへ下山。すでにキャラバン開始の馬方もあがってきています。乱筆になりましたがまた通信します。

なお、キャンプなどの高度は持参した高度計の平均ですので実際とは若干の差異が生じているものと思います。また、ムンジャン主峰、北峰はRCC隊の簡単な報告書から推定したもので、もしかしたら主峰が北峰なのかも知れません。（佐藤　優記）

HAJアフガニスタン登山隊現地便り（その４）

８月９日ダライ・ディアンビー谷B・Cにて

ディアンビー谷へ入る

アフガンではキャラバンに出てしまうと通信方法がなく、現地便りが遅れていることをおわびします。今、ムンジャン川のサングリッチ峠からかぞえて６つ目の谷（ディアンビー谷）の上流のBCにいます。明日（８月10日）から最後のキャラバンが始まります。

７月28日

第２の谷のB・Cを引き払って下山。バンダカーの方から出ている谷の増水で第２の谷出合を少ばかり下ったところで泊。

７月29日

減水した河川を渡り第３の谷出合をみながらマグナウルフへ。ここから河川ぞいに下ってショロン手前の第４の谷に入るつもりでいましたが、河が深く、馬が行けないと馬方にいわれました。兵士もアラカドリでチェックを受けねばならぬということで、アグナウルフから北側の急斜面を700 mも登って広大な台地上にでて夏村の放牧地のカルカ泊。

７月30日

アラカドリに下山。

７月31日

早朝、コマンダーのところでチェック。ショロンへ出て泊。ショロンは緑と水の豊富なこのあたりの中心地で村の中の木立の涼しい所にキャンプ。

スイス人の若い夫婦が我々より遅れてゼバック経由で来ていましたが、人類学の研究だそうで２カ月の滞在をするとかいっていました。村人から買ったアイベックスの肉、玉子、魚のフライなどでくつろいだ夜になりました。ゼバックからきた優秀な兵士はここで帰り、新たに別な兵士２人がつきました。

８月１日

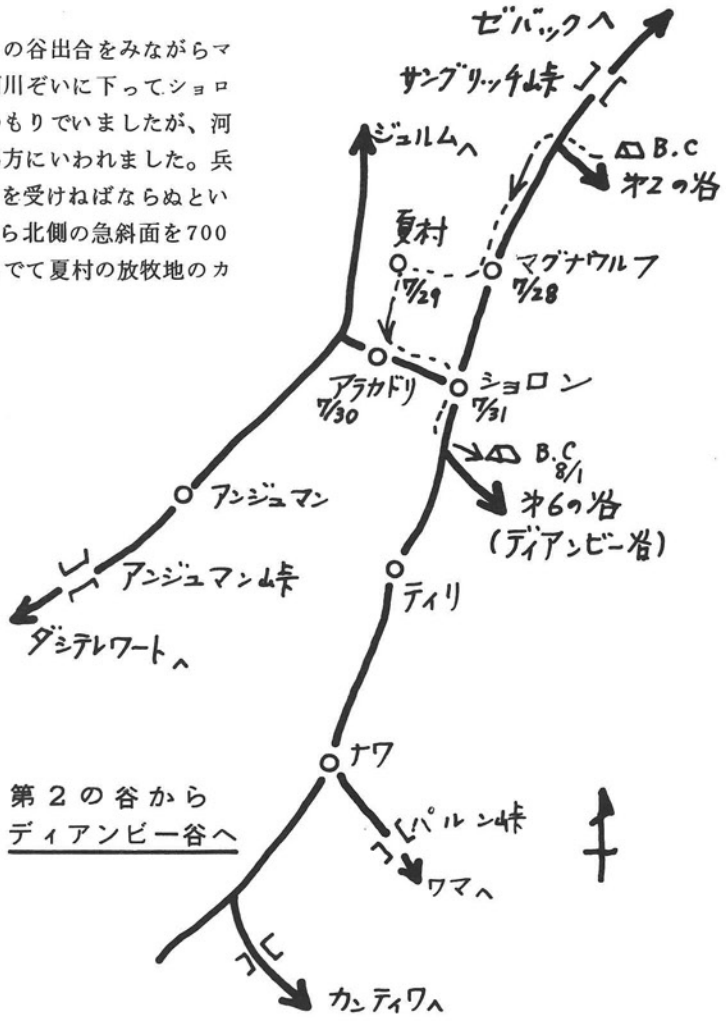
ムンジャン川の第６の谷、ディアンビー谷をつめてエンドモレーン下の標高3,880 mの地点にB・Cを設置。

８月２日

ポーター４人と松田、松舘、村山、佐藤の４人がC_1建設、氷河湖のある4,800 m地点では、ポーターは弱音をはくしまつで下山させる。

８月３日

合計、150 kgの荷を前記４人で荷上げ。谷のつ



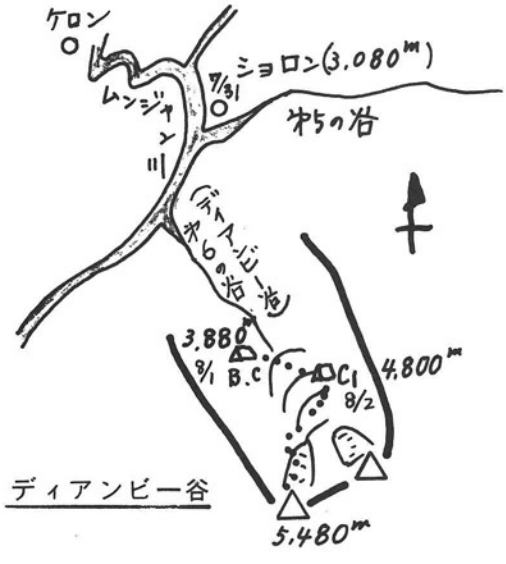
第２の谷から
ディアンビー谷へ

めで苦労しましたが内院氷河下の5,050 m地点の素晴しいところにC₂建設。ここはC₂からみて左氷河と右氷河とにわかれ、内院をつくっています。コーイ・ディアンビーが（推定5,800位）頭上高くつきあげています。翌、8月4日は休養した。

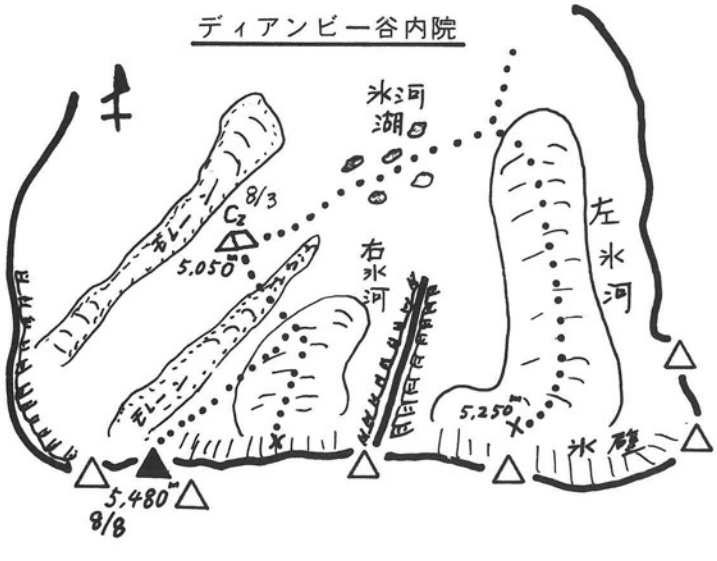
氷壁を登る

8月5日

松田、松舘、村山の3人は右氷河をつめ氷壁直下に行きルート工作。ピークにつきあげる最短距離を登攀するも落石とクレバスにはばまれて、いったん氷河上におり右側から登りなおす。氷壁の



ディアンビー谷



ディアンビー谷内院

4分の1位で今日は時間切れ。スクリュー・ハーケンの不足を感じる。佐藤は左氷河を探訪、内院のどんづまり、標高5,250 m地点まで行って引きかえす。テーブル・ストーンが無数にあり、氷河湖も5つほど大小、水の色もちがう美しいのがあった。

8月6日

－5.5℃（6時）、ぐんと冷えて秋の気配がこくなってきた。松田、松舘、村山の3人は再びルート工作に出て高度を上げたが、意外に手ごわく、氷河を3分の2登った地点で帰幕。何といってもフィックス・ロープが不足だ。（もちろんスクリュー用のピトンが有効でないとか）

8月7日

隊員の疲れのため休養。寿司などをつくってくつろぐ。

8月8日

今日こそはと思うが全天にまばらに雲が出ている。（正午すぎには全天雲、雪さえパラつく）出発した松田、松舘、村山のうち松舘、村山の2人は5,500 mまで登るも頂上には暗雲がとりつき、ヒンズークシュではめずらしいほどの悪天になってきたので断念し、下山する。準備している装備では登攀不可と決定、本日で活動を断念、しかし、心ゆくまで活動したといえる。

松田はコーイモンディ方向の谷の調査のため、氷壁途中より左岸尾根に登り、高度計5,480 mのピークをふむ。激しい風雪のため、視界はきかず、充分な偵察はできず、氷壁を試登した2人と同時に下山。

8月9日

B，Cへ下山。全員そろいにぎやかな楽しい会食日となった。（佐藤　記）

……・……・……

HAJ アフガン隊 報告会・予告

52年1月21日、18時30分
於：名古屋駅前、毎日ビル7階・インド航空

52年1月28日、18時30分
於：HAJ東京事務所

いずれも入場無料

……・……・……

HAJアフガニスタン登山隊現地便り（その5）

8月23日カブールにて

8月22日

カブールに帰着しました。ホテルに入る前に日本大使館へ寄り、沖留守事務局長からの通信を落手しました。「ヒマラヤ」最近号もとどいていて嬉しいことでした。

全隊員長期にわたるキャラバンに耐えて、たいした大病人もなくカブールに帰着できたことを喜んでいます。また完全に北から南へぬけたキャラバンも多大の成果と思います。

通訳もつれず、現地交渉もまあまあで、アフガンの旅を可能ならしめたことも今までにないことと思います。帰国して再びしっかりしたまとめをしたいと思っています。いろいろ御心配をおかけ致しました。ありがとうございました。

帰路のキャラバン

8月10日

最後のキャラバンを開始。ディアンビー谷のB・Cを引き払ってショロンに下山。

8月11日

今日はショロンからシャンディーへ。馬不足でロバを使い、さらにポーターに荷をかつがせました。ムンジャンの広々とした平坦な緑地の多いゆったりとしたキャラバンになりました。この日、小牛を1頭入手して（2,700アフ）豪快な肉食パーティになりました。

8月12日

シャンディからナワへ。ナワは6年前の大分隊の記録9戸の村から今では12戸の村になっていました。ショロンの荷夫達はここで全員帰ってしまいました。兵士2人も明日は帰るといい、馬は10頭いるといって我々を喜ばせました。

8月13日

昨日の話とは違って今日は、馬は数頭しかみあたらずナワの住人達も若者達が集まってくるものの、荷が重い、馬はいないとかケチをつけるだけでいっこうに出発できず、停滞と決定。一同洗濯や整理で終日、休養しました。

8月14日

早朝から出発の用意をしたが昼頃になっても出発できる状態ではなく、この日も、今、出発か、もう出発かと待ちくたびれているうちに暮れてナワの評価ははかばかしくなく皆ブウブウいいながら1日がくれました。

8月15日

ナワの荷夫達が出発する気になってキャラバン再開。それでもさんざんもめて出発。峠の方は暗雲がたちこめ、ナワの住人の人相もあまりよくないこともあり、前途多難を思わせる出発でした。

結局、馬は2頭のみ、あとは荷夫でスタート。この峠のことですがナワからすぐ谷に分岐する道はプルン峠で本流をさかのぼるのはウェラン峠であって、今までの記録はこれを混同しているようです。コーイ・モンディへ入った1965年の大分隊

ディアンビー氷河内院、右氷河と氷壁（佐藤　撮影）

はプルン峠をウェラン峠といっているようです。プルンの峠は明るく広けた谷でかつ長大な谷です。峠越えは3日かかりました。この日は夏村の放牧地で一泊。途中のせきとめられた小湖ではナワの荷夫が面白い程に針金で鱒をつり上げていました。

アフガン荷夫の心意気

8月16日

朝は素晴しい快晴でしたが峠の手前で雲が湧立ち峠の手前（4,450 m地点）ではアフガンでは本当にめずらしい雨となりました。荷夫の1人が不調で時間が早かったのですが幕営としました。

ナワのポーターの評価は出発時ははかばかしくなかったのですが、いざ出発のあとは強く、小休もほんの2～3分。ぐんぐんとばしてくれる。隊員がのんびりしていようものならブルブル（出よう、行こうの意）とせかされて、評価はかわりました。

8月17日

プルン峠を越えました。氷河湖が峠上にあり、峠の上は寒いくらいです。高度計は4,880 mをさしていました。

峠の南はガクンと下ってすぐ下に氷河湖が1つあり、エスティがはるか下に緑をみせていました。今日はエスティ泊というのをぐんぐんとばしてパルンまで下って幕営。ヌーリスタンの谷は森林が多く、緑もぐんとふえ、湿気もかなりあります。この日夕刻より雲が湧き立ち、夜、雷鳴と降雨でテントはすっかりぬれ、シュラーフも日本の山でよくあるようにびしょびしょにぬれてしまいました。

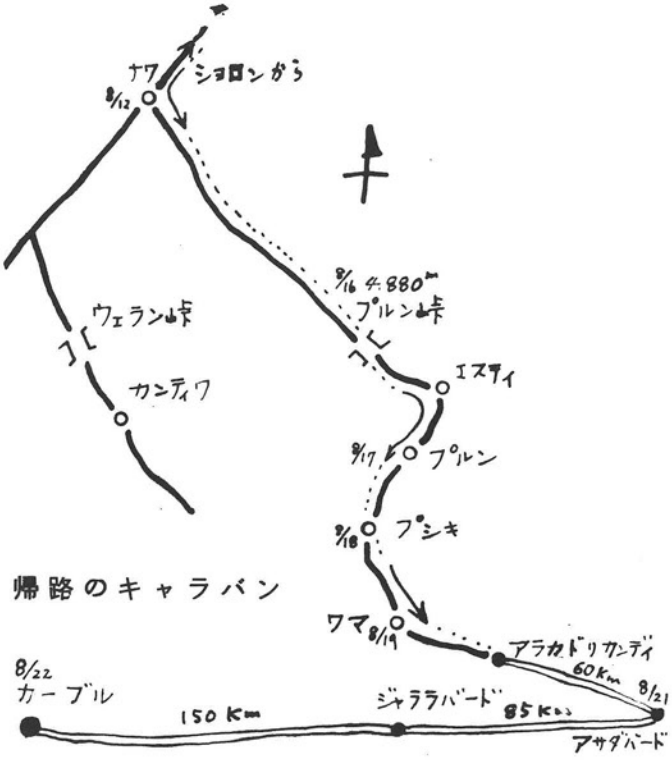
8月18日

プルンからプシキまでのキャラバンは午前中で終ってしまい、もっと前進したかったのですが、ナワの荷夫達はここからかえるといい出し、キャラバンを止められてしまい、幕営。午後シトシトと雨になりました。明日からの荷夫のこともはっきりせずその日はくれました。

8月19日

プシキの住人は我々のことなど関係なし、といったようでしたが、運よく村にいた下流のアラカドリカンディの住人の旅人が荷をかついでくれることになりました。しかし、7人しかおらず、ナワからついてきた青年もかつぐというがどうもナワでの印象がよくないし、また、かつがせようにもふっかけてくるので、隊長みずからキスリングをかつぎ出発。こんなこともアフガンではまずないことでしょう。

アラカドリカンディの人は重荷でもどんどんとばし、サブザックの佐藤が同伴できるのみ。距離ものばしてくれるが、キスリングの隊員は遅れにおくれ、幕営地についてから出迎えに出てもらう。荷夫たちも、皆、文句もいわず心地よく引きかえし、迎えに行ってくれたことはアフガン人への評価がかわったかにさえ思えました。最後の隊員が着いたのはすっかりくれた20時5分でした。



帰路のキャラバン

その夜は荷夫もまじえ、楽しい、疲れもふっとぶほどの、日本・アフガンのあたたかい交流の夜となりました。

8月20日

すっかり、荷夫に信頼をよせ、カランガンという地までとばしました。キャラバン最後の夜、3時間もかけてにわとりを4羽も買ってきたりしてくれて遅くまでみんなでたき火を囲みました。

8月21日

車の出る、アラカドリカンディへ昼すぎ到着。土地の名士の内庭に案内され受皿つきのチャイ、スープ、焼きたてのノンの午食を受けて、うまい具合にトラックをつかまえ星空の素晴しい夜のとばりの中をアサダバードへ出る。23時30分コナール・ホテルの真暗な部屋に入る。

8月22日

ほこりにまみれてジャララバードへトラックで。そこからベンツのバスの22人乗りをチャーター。ハイウェイをカブールへ快適にドライブしてアリアナ・ホテルに入りました。

8月23日　装備の整理

8月26日　カブールを発ち、ペシャワールへ。

8月27日　ペシャワールからラワルピンディへ。

8月29日

ラワルピンディからPIA，PK752便で北京へ。機内で1泊。

8月30日　午後羽田着で帰国。

（佐藤　優記）

HAJアフガニスタン登山隊現地便り（その6）（最終回）

カブール帰着のあと

8月24・25日

佐藤、村上の2隊員はバーミャン・バンディアミールへ行ってきました。残る隊員は装備の整理、パッキングにすごし、また、土産ものなどを求めました。

8月26日

カブールからペシャワールへ。アフガン・ポスト・バスでカイバー峠越え。税関では隊長が"詐欺師（？）"的な手腕をみせ、アフガンの出国も、パキスタン入国も、一個の荷のオープンもありませんでした。

ペシャワールではディンズ・ホテル投宿。あまり心地良いホテルなので2泊して身体を休めました。あるものは市内へ、あるものは博物館へ、あるものは買物へ、あるものは睡眠と、それぞれおもいおもいにすごしました。PIA（パキスタン航空）のチェックはここで済ませました。

8月28日

ペシャワールからラワルピンディへ。ペシャワールのディンズ・ホテルとチェーンになっているフラッシュマンズ・ホテルに投宿。

8月29日

朝8時空港へ行き、フライト・スケジュールの変更を知らされ（理由は明確でない。のち、市内のPIAオフィスでの説明では中国の地震が理由だった由）12時間ホテルで待機。この費用は隊長の名渉外でPIA持ちとなりました。

9時空港へ。隊荷はトータルで50kgオーバーでしたが、ここでも隊長の見ごとな対話（？）で超加料未納でOK。予定の10時15分がきても機内に入れず、11時になってやっと機内へ。

しかし、席は自由で、エコノミーはほとんどふさがっており、最後までついてまわった"つき"はとうとう4名の隊員（隊長、村上、寺林、佐藤）はファーストクラスの席へ案内され、思ってもみない豪華な夜間飛行となりました。

8月30日

北京は小1時間の小休、それでも往路で要領を知っている隊員は、さっとターミナルで両替、タバコ、マオタイ酒などを買いこみました。羽田へは14時、小雨の中を着陸。税関は他のルートの帰国者なども混えて大変な混雑で、1時間～1時間半かかりましたが、15時30分、通関を終え、出口で一同そろって解散しました。

（佐藤　優記）

お礼とごあいさつ

この隊の派遣に際しましては多くの関係各位のご協力を賜わりました。心からお礼申し上げます。登山行動その他は、この現地便りで報告した通りでございます。長い間のご支援に対して重ねてお礼申し上げます。

会長　柴田金之助、留守事務局　沖允人

隊長　有田豊　他　アフガニスタン登山隊一同

4度目のネパール

50. 10. 20 ～ 11. 30

藤　江　幾太郎

昨年4度目のネパール訪問をしました。バンコクに1泊、ローヤルネパール機で一気にカトマンズに向いました。近付くヒマラヤの連峯は毎度のことながら素晴らしいなどというも愚か、形容に絶する美しさで、しばし、機の窓に息をのむ思いでした。これは私だけではありません。感激の裡にトリブバン空港に降り立ち、同乗のエーデルワイス・クラブの方々と共に先づはランジャンのエクスプレスハウスへ。ここでトレッキングの準備です。

世話をして貰ったシェルパはパサンブター、ターメ生。35才。小柄で口数は少ないが誠実そうな男。一緒にアサンへ、行動中の食糧、炊事道具などの買出しに出掛けた。テント、シュラフはランジャン方より借入。

ポカラでポーター3名傭入れ、パサンと5名で愈々山奥に向ってポカラを後にしました。途中欧米人の団体と前後したり、現地人の巡礼達、ムスタンからの旅行者と出合ったりしながら、バッティ、カーレ、ビレタンテと緩くり写生しながら泊を重ね、キルティルドウンガでは腹調不具合で一日滞留したあと、一気にゴラパニへとラリグラス（しゃくなげ）の樹林をわけ登りました。

その夜はひどく冷え込み時々目を醒ましました。翌暁、猛烈な下痢で、足元がふらふらし、口が無暗に乾いて、脱水症状を起しては、この山奥で助らないとの焦燥と不安に襲われました。天祐か、近くに幕営中の日本人パーティがおり、ドクターから薬品の親切なアドバイスを頂き、やっと落着きを得ました。も早ダウラギリ主峯の写生どころではなく（そこからすぐ上なのですが）如何に大事に至らぬようにポカラへ帰着するかです。結局、この隊と前後しながら、ウレリ、チャンドラコット、ノーダラと往路を戻り、ポカラに戻りました。

ポカラでは旧知のAPセルチャン宅（川喜田二郎著「ネパール王国探険記」に出てくる＝カッパブックス）に十数日逗留、静養旁々写生しましたが、充分、回復せずカトマンズへ戻りました。ここでは藤原レイコさん経営の新設コテージ・オーロラに十数日世話になりました。お粥に梅干しからやり直して胃腸の回復を計りながらカトマンズ市内や近郊を写生して廻りました。ニューデリーに入院加療中だったIMセルチャン氏の全快帰宅を知らせてくれたのは前記ポカラのセルチャン氏の息子ビカール君。一緒に同家を訪れ、回復を祝いました。　（山の画展・パンフレットより）

ネパール理事・ランジャン氏来日

HAJのネパール理事・ランジャン氏が去る8月5日から26日まで来日された。短い期間であったため、多くの会員に逢っていただく機会はなかったが、下記のように各地で集会などを開催した。

山形県長井市の集会

8月14日～15日長井市で東京から同行された高橋照氏も加わり、30名が集まった。ネパールの最新情報が提供され、有意義な集会であった。特に登山規則、出入国規則が変更されたこともあり、話題はこれらの点に集中した。

HAJ長井グループの方々には大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。　（稲田）

名古屋集会

柴田会長をはじめ10名ほどが日本料理を食べながらネパールの想い出話や、これからのHAJのネパールでの活動などを話しあった。今年の年末年始はカトマンズのホテル、国内のフライト、シェルパともかなり混雑する予想で、早目に日程を決めて予約をおこなわないと、予定通りに行動できないことになりそうです。ヒマラヤ・ツアーに関してはHAJ東京事務所にお問合せ下さい。（沖）

＜ミニ・ニュース＞

インド・ヒマラヤ登山手続費値上げ

従来、1,000Rsだったのが、1977年1月1日以降の隊は2,000Rsに値上げされた。また、隊荷の輸入は、消費するものそうでないものに分けたリストを5部IMFへ送り、インド政府の許可などを入手できるよう簡易化された。

ヒマラヤに関する質問と回答

<問>　飛行機に乗り遅れたらどうなりますか。

<答>　予約の再確認をし、OKになっているにもかかわらず、事前に連絡なしに乗り遅れたら、事情のいかんにかかわらず「ノー　ショー　チャージ」という料金をとられます。したがって、遅れそうになったらできるだけ早目に連絡を、当日の飛行機会社の事務所または空港カウンターにしておくことです。

トレッキングに行っていて連絡のとれなくなることもありますが、その場合は、出発前に「○月○日○時までに帰らなかったらキャンセルの連絡をして下さい」とその町のホテルの人か、友人などにたのんでおくべきです。これはギリギリの時間をいっておくことです。ギリギリに間に合うように帰ってくることもあるからです。

上記の連絡をとらないと原則として切符は無効になることをお忘れなく。

そして、連絡後できるだけ早くその航空会社に行き、事情を話して次の便を予約してもらうなどの便宜をはかってもらうのがよいでしょう。

<問>　外国で道に迷ったとき、どうしたらよいでしょうか。

<答>　宿泊しているホテルの住所、名前、電話番号、部屋番号位は必ず手帳にメモしておくこと。これをたよりにタクシーなどで帰ることができます。できればホテルのフロントなどでカードにでも現地語で書いてもらっておくと便利です。英語の通じないこともあるからです。夜間の外出の場合は方向を失ないがちですし、悪い人に摑まることもありますので特に注意をし、友人と複数ででかけるなど、あらかじめ想像できる事態を考えておくことです。特に現地名のホテルの名前は憶えにくいものですからくれぐれも気をつけることです。

<問>　カバンはどんなのがよいでしょうか。

<答>　ヒマラヤ旅行はカバンよりもリュックサックが便利ですが、どうしてもカバンを持って行きたい方は、まず、カギのちゃんとかかるもの、雨が降っても中のぬれない構造のもの、ハードケースであるものが必須の条件です。メーカーによっては他のキーで簡単に開くものもありますので、念のために確かめ、さらに、スキーや自転車用のキーつきのバンドをかけておくとよいでしょう。とにかく、カバンはドロボーの目につきやすいことを忘れないように。

<問>　携行品を要領よくつめるにはどうしたらよいですか。

<答>　洗面具、手帳、カメラなどよく使うものはすぐ取り出せるところに入れ、途中で不必要なものは下の方に入れるなど内部をよく整理し、小物袋などで区分けしておくことです。薬のビンなどはビニールの袋やポリビンに入れかえたりして容積を小さくするのもコツです。

シャツやくつ下などはバラバラにしてつめ物に使うと場所をとりません。

そして、持参品リストはツメ切り一つまで記入した細かいものを作っておくと便利です。特に長い旅行になると紛失したり、持参したかどうかをチェックしたりするのに有用です。

<問>　現金と小切手はどのくらいの比率がよいでしょうか。

<答>　東南アジアからインド方面では小切手は大変使いにくいので、予備金以外は現金、それも、米ドルが一番有利でしょう。特に、地方を旅行される人や登山される人は、田舎では小切手はまず使えないと考えておいてもよいくらいです。西独マルクや日本円も使えますが大都会のみですし、交換レートも米ドルより悪いのが普通です。

小切手は発行手数料が1％ほどかかります。ただし、紛失したときに番号をひかえてあれば元金を保障してくれるという利点はあります。

河口慧海の会参会記

第11回河口慧海の会は師の記念碑のある大田区九品仏浄真寺において5月30日開催された。当日は外語大の北村甫教授からチベット語を中心に慧海師におよび、また、師の講義を長く受けられた松本常太郎氏の話を伺った。参会者50名、高山竜三氏、川喜田夫人も見えた。当会より、植竹氏と小生。なお、余興として昼食時に、小生持参のカトマンズ放送のテープ（ラマ教読経、民謡等）を流した。次回は明年5月に開催予定。（藤江幾太郎）

新刊・旧刊

ヒマラヤ・トレッキング

五百沢　智　也　著
山と渓谷社　4,800円

ヒマラヤトレッキングを特集した「岩と雪」等27号が売り切れとのことだ。いまやトレッキングは旅行社ばかりでなく、出版社でも安定した売上げと利益？を見込める企画となったらしい。

この6月～7月にかけても関係の単行本数点が出版され、「岩と雪」第50号の特別付録はトレッキングコース全ガイドだった。本書もそんな時流にのっているけれど、通常の案内書と違いむしろ「ヒマラヤ地誌」的内容と思える。

大ヒマラヤの自然と大地、人、歴史に始まり主テーマのトレッキング基地とコース案内が、絵と図によって簡潔、的確に描かれている。中でも山々を空中から斜めに見おろしたような山姿図が実体そのもので新鮮な手法だ。これらは、地形図（各国発行）と航空写真（多くは著者撮影）から著者が大変な労力をかけて、たんねんに立体再製した力作である。この手法によく似た図としてボルマン社（西ドイツ）の欧州都市図が市販中だ。両者に共通するのは、図を眺めて感嘆、次に図を読んで容易にその土地と人間生活を知ることができる点だ。

従来、絵にたよると不正確になりかねなかったが、この本では写真の即物性へ絵の印象性をまじえて事物を再現した。絵が確実であったためにそれが成功した。もしも、我々がこの方法を紀行本や報告書に転用してもむずかしい。本書の別の特色は、レイアウトやカラー印刷のできぐあい、また、「年表」などに見るごとく、活字表現でさえも方法によっては図のように見せてしまう手腕のことだ。活字出版物専門のレイアウトで扱ったら本書は違う雰囲気にできあがったろう。

ところで他文献から図を引用するとき、本書では必ず出典名をつけ同時に当然のごとく著者（出版社）は著作権をきちんと主張、銘記した。それならば現地で写真撮影された人の権利はどうだったろうか。わが国内では、撮られる側のことはさておき、撮った側相方（にあたるだろう）が利益を争っている昨今だ。

しかし、著者はあわせて「そこに住む人も幸せにするような旅こそ本当の旅」とのべ、その原則は各ページに心くばりされている。もちろん、取材時もそうであったろう。加えてタイトルなどへ英文をつけたことで国外の旅行（業）者以外に現地の人達にとっても有用な書になった。

また、探検指向の著者は、読者がトレッキング中に何か新しいことを発見するための手引きとして、本書を利用するのを望んでいるようだ。そしてそのためのヒントを与えてくれている。かつて、ヒマラヤ登山者達の間で地図作りが必要だとよく提唱された時、本当は、それ以前の自然観察能力こそまず解決せねばならなかったのだが、こういった面でも本書は、記載以上の世界へ、ガイドしてくれるだろう。（その時、参考となる著者関係文献を以下にあげてみた）

以上いくつかの良い所は反面、本書の高価格と出版広告後から発売日までの期間を長くした。だがヒマラヤを知るためにトレッキングが役立つことは言うまでもない。本書がそのために分冊化し値上がってもやむをえないだろう。

「自分で工夫する山の自由研究」　五百沢智也著

著者の子供（小、中学生）達が月山を中心に、動植物、地形、山伏、家屋の形などを調査し報告する。専門学をわかりやすく、かつ正確に表現している。ふりがなつきで本来は子供向けだ。

朝日ソノラマ社　¥900

「あるく　みる　きく」　日本観光文化研究所

五百沢氏著作の「山形盆地」は第65号。著者の考えられる「旅」と相通ずるであろう編集方針のもと、毎月発行の近畿日本ツーリストＰＲ誌。東京都台東区台東１－12－11第２コモダビル内同所。年間　¥1,500　監修、宮本常一

「8,000m峰へのパスポート」「The sky View Sketch over Nepal Himalayas」「氷の山・火の山」　いずれも「岳人」（月刊・中日新聞東京本社）連載。　五百沢智也著。　（ひ）

第６回東日本ヒマラヤ研究会（宇都宮）
報告書・予約受付中・〆切―11月末日

ＨＡＪ会員に限り１人５冊まで。予約価1,800円（定価は2,400円）送料ＨＡＪ負担。〆切後は会員の方でも定価＋送料（200円）で購入していただくことになりますのでご了解下さい。

「ヒマラヤ」主要目次　第51号～第60号

第51号　51. 2. 1　ヒマラヤ・ツアー特集号

ヒマラヤ概説……大崎　正信…　1－　1
インド・ヒマヤラへどうぞ……S・クマール…51－　3
ヒマラヤ・ミニ・ガイド……51－　4
カシミールの夏……鈴木　康志…51－　5
秘境ラダックを訪ねる旅……51－　6
ダウラギリの雄姿を見る……51－　7
アンナプルナ南面の旅……51－　8
エベレストのふもとへ……51－　9
ヒマラヤの旅ー質問と解答ー……51－10
HAJヒマラヤツアー案内……51－16
ヒマラヤの本・資料……51－13
入会のおすすめーみんなのヒマラヤー……51－14

第52号　51. 3. 1　1975年HAAJインドヒマラヤ遠征特集号

1975年日印合同カシミール・ヒマラヤ遠征隊
遠征実施にいたるまで……事務局長　稲田　定重…52－　1
概要報告(1)　主として先発隊の行動……隊長　西郡　光昭…52－　2
概要報告(2)　山森副隊長のヌン・クン通信から・本隊行動記録……山森　欣一…52－　6
NUN(7,135m)アタック記……保坂　昭憲…52－10
1975年HAAJガルワール・ヒマラヤ遠征隊
遠征実施にいたるまで……副隊長　稲田　定重…52－12
P. 6992、Ca. 7,000(P. 6911)、BAMCHU(6303)初登頂(GH隊行動の概要)
稲田　定重…52－13
P. 6992(Mt. RISHI PAHAR)峰登頂記……舘野　秀夫…52－18
Ca. 7000(P. 6911、SAF MINAL)初登頂……今井　二郎…52－19
隊長　現地通信より－6,992m峰全員征服に男泣き……隊長……清水　澄…52－21
月明りのバムチュー(6,303m)　リエゾン・オフィサー　B.P.S　フンダル中尉…52－22
バムチュー登頂のいきさつ……清水　澄…52－23
"ナイス・ガイ"われらのリエゾン・オフィサー……清水　澄…52－24
インド・ヒマラヤ登山の申請方法……52－5
ヒマラヤの本・資料……52－11
お礼のことば……HAAJヒマラヤ委員会・遠征隊…52－24

第53号　51. 4. 1

第6回東日本ヒマラヤ研究会・開催要項……53－1
初登頂の2峰に命名……53－3
インド・ヒマラヤ概説……沖　允人…53－3
インドを旅して……保坂　昭憲…53－5
ネパール政府・登山規則を一部改定……53－7
ネパール学術調査報告参会記……藤江幾太郎…53－7
＜ヒマラヤ閑話＞　(4)　ヒマラヤの意味……水野　勉…53－8

雲の上の村……山倉　洋一 … 53－ 9
<ラダック小史>(1)　遠征と崩壊、そして平和 ……大木滝次郎 … 53－11
写真展「ネパールで出会った人たち」……植竹　清孝 … 53－13
ヒマラヤに関する質問と解答 ……53－14
ブランマⅡ（6,485m）登頂・帰国挨拶 ……札幌山岳会 … 53－15
ダージリンの印象……稲田　定重 … 53－16
パミールとコーカサスの山・オープン ……53－17
新刊・旧刊 ……53－18
ヒマラヤの本・資料 ……53－20

第54号　51.5.1

アッサム北部の山岳地帯をめぐって－東部ヒマラヤ研究会へのお誘い……藤井　毅 … 54－ 1
ラダックの開発　インドの月刊誌「HIMAVANTA」1975年3月号より ……54－ 2
NK、GH両隊報告会開く ……54－ 3
サンダクプー紀行……舘野　秀夫 … 54－ 5
<ミニ・ニュース>　新ネパール大使決まる ……54－ 5
ヒマラヤ学入門（その38）　植物検疫について ……54－ 5
ヒマラヤ学入門（その39）　パスポートの取得方法……鈴木　康志 … 54－ 6
ドウナギリへ遠征（青森岳連隊）……54－ 7
<ラダック小史>(2)　征服と崩壊、そして平和……大木滝次郎 … 54－ 8
ダウラ・ヒマールの旅　1974.12.～1975.1 ……清野　孝 … 54－11
Expeditionグループ研究会－体質改善、遠征の方向などを決定 ……54－14
AFGANISTAN旅行メモ ……54－15
ザスカールへの夢（続）……沖　允人 … 54－16
ヒマラヤに関する質問と解答 ……54－19
新刊・旧刊 ……54－20
HAAJ出版物などの委託販売について ……54－20

第55号　51.6.1

第6回東日本ヒマラヤ研究会（開催要項）……55－ 1
総会報告 ……55－ 3
ヒマラヤとシルクロード大作戦－創立15周年記念事業計画－ ……55－ 5
HAJヒマラヤ集会……55－ 7
HAJアフガニスタン登山隊1976……55－ 8
<インドの北辺境>　<1>　スカルドウからレーへ……フレデリック・ドリュー … 55－10
<ヒマラヤ閑話>(5)　ヒマラヤの商人たち……水野　勉 … 55－14
クンブの旅（ネパール）1975年 ……片岡　喜恵 … 55－15
ヒマラヤに関する質問と解答 ……55－17
ヒマラヤ学入門（その40）英語の学び方（練習）……沖　允人 … 55－18
<誌者だより>　日本からヒマラヤから ……55－19
新刊・旧刊 ……55－20

第56号　51.7.1

HAJ秋のヒマラヤ集会の案内……56－ 1
みんなのヒマラヤの再確認から－専務理事就任にあたって－… 専務理事　岩水　竜峰 … 56－ 1

＜インドの北辺＞ ＜２＞ スカルドウからレーへ（続） …… フレデリック・ドリュー … 56 － 2
ザスカール山群の旅ースルよりパハルガムへーHAJ 酒田グループ・ザスカール踏査隊ー … 56 － 6
＜ヒマラヤ閑話＞ (6) ミニャ・コンカ …… 水野 勉 … 56 － 11
ヒマラヤとシルクロードの音楽ー関係の民族レコード目録ー …… 花崎 洋 … 56 － 13
ヒマラヤ学入門（その41）ヒマラヤ紀行などの自費出版をしたい方へ …… 沖 允人 … 56 － 14
ヒマラヤに関する質問と解答 …… 56 － 14
第５回HAJ ヒマラヤ委員会要旨 …… 56 － 15
＜ミニ・ニュース＞ 長谷川伝次郎氏逝く …… 56 － 15
世界の屋根を行く＜１＞ 秘境ラダック …… 増田 秀穂 … 56 － 16
HAJ 名古屋集会報告（その１）、（その２） …… 56 － 18
HAJ 研究会々員募集（Expedition 研究会、チベット研究会）…… 56 － 18
新刊・旧刊 …… 56 － 19
ヒマラヤの本・資料 …… 56 － 20

第57号 51. 8. 1

＜創立10周年をひかえて＞ HAJ を考える（その１）会員 …… 57 － 1
ネパールの外国人に関する規則改訂される …… HAJ ネパール理事 B・ランジャン … 57 － 2
＜ミニ・ニュース＞ インド登山規則改訂さる …… 57 － 3
ラダック (1) …… S.C. コウル … 57 － 4
ブータン研究会から …… 矢野 郁雄 … 57 － 6
＜関係の機関・団体＞（その１）東洋文庫 …… 57 － 7
＜ヒマラヤ閑話＞ (7) ヒマラヤのノーメンクレーチュア …… 水野 勉 … 57 － 9
名古屋集会報告 …… 57 － 9
Expedition 研究グループ＝会員募集＝…… 57 － 10
＜H＆S Planのページ＞（その１） ビルマ・雲南への夢…… 藤井 毅 … 57 － 11
HAJ アフガニスタン隊だより（その１） 八甲田山合宿の報告 …… 佐藤 優 … 57 － 11
＜速報＞ 第６回東日本ヒマラヤ研究会開く …… 57 － 12
＜読者だより＞ 日本からヒマラヤから …… 57 － 12
世界の屋根を行く＜２＞ カルギルからレーへ …… 増田 秀穂 … 57 － 13
ヒマラヤに関する質問と解答 …… 57 － 16
HAJ 名古屋第１回山行・鈴鹿山系の最高峰へ（写真）…… 57 － 17
ヒマラヤ学入門（その42） ヒマラヤの国の取締法規など …… 鈴木 康志 … 57 － 18
最近の映画とテレビから …… 花崎 洋 … 57 － 19
新刊・旧刊 …… 57 － 20

第58号 51. 9. 1

HAJ を考える（その２） 組織とメンバーのあり方 …… 山倉 洋一 … 58 － 1
H＆S Planのページ（その２） サセル・カンリ＝ラダックの名峰…… 沖 允人 … 58 － 2
耳で感じるヒマラヤー――わが国で聴取できるヒマラヤ諸国の放送 …… 楢田 定重 … 58 － 3
“初のインドヒマラヤ会議”第６回東日本ヒマラヤ研究会・速報 …… 楢田 定重 … 58 － 4
ラダック (2) …… S．C コウル … 58 － 6
HAJ 出版物について …… 58 － 8
ラマ教の世界 …… 岩水 竜峰 … 58 － 9
ヒマラヤ学入門（その43） 旅券についての諸手続 …… 鈴木 康志 … 58 － 12
＜関係の機関・団体＞（その２） 日本ネパール協会 …… 58 － 13

HAJ・カンジロバ登山隊公式報告書ー出版予告ー …… 58 ー 14
日本からヒマラヤから …… 58 ー 14
HAJ名古屋集会報告 …… 58 ー 14
"ヒマラヤ山荘"オープン …… 58 ー 14
HAJアフガニスタン登山隊ー現地だより（その1） カブール着、出発準備 …… 58 ー 15
〃 （その2） ワハン入域不許可ー転進 …… 58 ー 15
帰国挨拶ー青森県山岳連盟八戸ヒマラヤ遠征隊 …… 58 ー 16
HAJ会員による出版物（歴史と砂漠の山）（ヒマラヤを目指した越中人たち） …… 58 ー 17
新刊・旧刊 …… 58 ー 18
アッサム・シッキム調査隊について …… 58 ー 19

第59号 51.10.1

HAJヒマラヤ集会
HAJを考える－（その3）ヒマラヤとシルクロードの何に興味が？ …… HAJ事務局 …… 1
パゴダの国・ビルマの1週間 …… 沖 允人 …… 2
ヒマラヤ関係地図＝市販リストから …… 岩水 竜峰 …… 5
H&S Planのページ・アルナチャル……太陽の昇る山の国 …… 東部ヒマラヤ研究会 …… 7
IAA（国際芸術家協会）ネパール委員会訪問記 …… 藤江幾太郎 …… 7
＜ヒマラヤ閑話＞(8) 花の谷(1) …… 水野 勉 …… 8
ロングスタッフのサルトロ峠越え …… 沖 允人 …… 9
Bikal P. Sherchan来日 …… 藤江幾太郎 …… 10
清水澄氏（HAJ）マナスルへ遠征 …… 10
ヒマラヤに関する質問と解答
HAJ名古屋第2回親睦登山・御岳……濁河温泉より …… 沖 高行 …… 12
HAJ名古屋集会報告（その1）、（その2） …… 13
日本からヒマラヤから……読者だより …… 14
アッサム研究会だより …… 16
第5回ビスタリークラブ集会開く …… 黒沢 文代 …… 16
＜ミニ・ニュース＞地方・小出版流通センター …… 16
新刊・旧刊 …… 17
ヒマラヤの本・資料 …… 18

第60号 51.11.1 特集・1976年HAJアフガニスタン登山隊現地便り

HAJを考える（その4） ヒマラヤへの最短距離 …… 60 ー 1
研究会だより－東部ヒマラヤ研究会 …… 60 ー 2
＜H&S Planのページ＞（その4）（その5）パミール計画、カンチ計画、サセル計画、など …… 60 ー 3
最近のカンジロバへの隊概要 …… 沖 允人 …… 60 ー 4
河口慧海の会・参会記 …… 藤江幾太郎 …… 60 ー 15
ヒマラヤ学入門（その44）パキスタン航空について …… 60 ー 5
日本からヒマラヤから …… 60 ー 5
HAJアフガニスタン隊便り（その3）～（その6） …… 60 ー 6
4度目のネパール …… 藤江幾太郎 …… 60 ー 14
ネパール理事・ランジャン氏来日 …… 60 ー 14
ヒマラヤに関する質問と解答 …… 60 ー 15
新刊・旧刊 …… 60 ー 16
「ヒマラヤ」第51号～第60号 主要目次 …… 60 ー 17

ヒマラヤの旅はヒマラヤのヨロズ屋へ

トレッキングからエクスペディション
まで全て引き受けます。

装備貸出・シェルパ斡旋・現地食料調達
国内外輸送手配・別送貨物通関・ヒマラヤ情報……

EXPRESS TREKKING (P) LTD.
EXPRESS HOUSE
NAXAL BHAGABATI BAHAL
P. O. BOX339 KATHMANDU NEPAL
電略 GREATREK・KATHMANDU TEL. 13017

カトマンズの宿泊は EXPRESS HOUSE
をご利用ください。
家庭的なムードで宿泊代も安く気軽に泊れる宿です。
特に日本のお客様には大浴場が好評です。自炊もできます。 宿泊代＝1泊朝食付30RS から
※長期滞在者はご相談に応じます。

日本語でお問い合せください

インド大陸、中近東方面へ当社独自のプランをいたしております

ツアー名

★シルクロード 6,000キロ
★ネパールとアフガニスタン
★砂漠の国アフガニスタンと最後の桃源境フンザ
★大ペルシャとアフガニスタン

——お問い合わせは下記まで——

(株) トラベル日本
〒100 東京都千代田区有楽町2－2－1
ラクチョウビル5F 電話 (03) 572-1461
担 当——外池(とのいけ)・永瀬・月候・小島

海外登山，トレッキングに傷害保険を

海外旅行傷害保険(運動危険担保特約付)について研究しております
岳(タケ) 産 業にご相談して下さい！

あなたの所得を補償する保険をご存じですか？ (所得補償保険)
●所得補償1～5年，傷害特約60～120倍までいろいろあります

自動車・火災・レジャー(山岳保険・国内旅行・つり・ゴルフ・ヨット)・普通傷害・利益・生産物等の私達の生活に関連した保険を取扱っています。岳産業の西田までご連絡下さい

大正海上火災保険(株)代理店 岳(タケ) 産業
大阪市淀川区西中島町5丁目第3チサン10F 6号 〒532
TEL 06〔304〕1115番
●ルスノトキ＝大正海上十三営業所 304－5774

昭和51年5月9日第三種郵便物認可（毎月1回1日発行）

大自然の神秘と雄々しさ、ガッツなトレッキング——ヒマラヤ

東はブータン・シッキムから、西はガルワール・ラダック、そしてカシミールへと三千キロ。実に、ヨーロッパ・アルプスの二倍です。雄大な八千メートル級の巨峰の連なるヒマラヤを自分の足で踏みしめ、自分の肌で感じるワイルドなトレッキングは、どのレジャーも及ばないスケールの大きさと心の安らぎを与えます。

ノー・公害
時間に追われ、人間関係のわずらわしさに悩み、たまには仕事から逃げ出したいと思っている都会のビジネスマン達。彼らにこのヒマラヤ山麓の魅力を教えてあげてください。8000m級の巨峰が連なる大自然の景観。斜面一帯を華やかに色どる花園の美しさ。海抜4865m、常に雪塊や氷塊をたたえているアルハルウット湖の神秘的な静けさ。すべてが彼らの求めている超現実的な世界です。

ダージリン
ヒマラヤのリゾートタウン「ダージリン」は海抜2134mの高地にあります。インドの上流階級や外国人たちの別荘も多く、健康的な雰囲気にあふれた街。このダージリンの南東わずか11キロの地点にあるタイガー・ヒルから望むカンチェンジュンガ（世界第3位）やエベレストの偉観は、文字通り世界最高のもの。見る人の心に衝撃にも近い感動を与えずにはおきません。

シッキム
ごく最近まで鎖国状態であったシッキムへ入境することができるようになりました。観光客のほとんどない現代の「桃源境」とはここのことです。王宮を中心に神秘の国が、静かなたたずまいを見せています。ダージリンからの途中にあるカリンポンの町も、長期滞在に向いた静かなリゾート。買物も楽しい思い出になるでしょう。
〔註〕シッキム入境の場合はインドのビザとは別に特別許可が必要です。詳しくはエア・インディアにお問い合せください。

ガルワル・トレッキング
ガルワル地区は、デリーの北東約400キロの地点にあり、1974年7月から外国人に解禁されました。ナンダデビー（7816m）や、ガンジス川の源流近くにあるヒンズー教の聖地をたずねるトレッキングや、高山植物の宝庫"花の谷"や4000mをこす山岳湖への旅が楽しめます。

世界の35都市をネットする——
エア・インディア
東　京●千代田区有楽町日比谷パークビル〒100☎214-7631
大　阪●東区備後町松豊ビル〒541　☎264-1781
名古屋●中村区堀内町ホテルニューナゴヤ〒450☎583－0747
広　島●鉄砲町1-20第3ウエノヤビル〒730　☎28-7211

発行者　柴田金之助
編集「ヒマラヤ」編集委員会
名古屋事務所　〒四六八　名古屋市天白区一つ山一－四十四－七　☎〇五二－八〇一－四四一四
東京事務所　〒一六四　東京都中野区中央三丁目四十五－十八　沢本ビル1F　☎〇三－三六五－二一六二